

学内広報

2022.7.25

no.1560



6月17日、安田講堂で行われたフジコ・ヘミング演奏会より



UTokyo
Diversity&Inclusion

志ある卓越。



駒場リサーチキャンパス
公開2022に行ってみた
D&I宣言を制定

NEW X WEEKEND! 年に一度の祭典を写真でレポート

駒場リサーチキャンパス公開

T●駒場リサーチキャンパスを回って
みて印象的だった企画を紹介していこう!

A●1は初日のオープニングセレモニーの
ひとコマ。両所長の挨拶の後、生研の岩
船由美子先生と先端研の河野龍興先生に
よるカーボンニュートラルがお題の講演
で今年のリサーチキャンパス公開の幕が
開きました。2は音響実験室。3次元音場
再生システムを使って特徴的な環境の音
響が再現され、まるで花火大会の会場に
いるような迫力サウンドには子どもたち
が歓声を上げていました。私もですが、
T●音を吸収する壁がかっこいいね!

模型かと思ったら生体!

A●3は実験室をバリアフリー化する試
みの紹介。シンクが上下したり蛇口に触
らなくても水が出せたりと車椅子の研
究者でも使いやすい水回りを探っている
そうです。4はサイボーグ昆虫で有名な神
崎研究室のカイコガ。模型かと思ったん
ですが、メスのフェロモンを嗅がせると
動き出して……びびりました。

T●よく見るとなかなかかわいいかも♡

A●5は痛みを感じずに薬が注入できるマ
イクロニードルパッチ。体の状態を把握
するセンサーにもなるそうです。6は自
動航行しながら南極の氷の裏まで計測
する自律型海中ロボット (AUV) MONACA。
ウミガメを自動追跡するAUVもあるそ
うです。7は「再生可能燃料のグローバ
ルネットワーク」のイベントで展示されて
いた、電解液から水素を取り出す装置。
水素燃料電池搭載車MIRAIの展示もあり
ました。T●11日には数学科卒のピアニ
スト中島さち子さんのHydra Quartetによる
ライブもあったよ。「水素でつなぐ四重奏」!

A●8は振動で発電する微小電気機械シ
ステム。仕組みは理解できませんでしたが、
板が動いて小さい粒々が光っていました。
9は航空機の構造部材に埋め込んだ光フ
ァイバーをセンサーにして損傷を検知す
る研究の紹介。模型はボーイング787です。
10は研究者と来場者が描く未来を記した
紙を吊るす樹木。学術版の七夕かも?

T●11は、土や地盤の挙動を扱う研究
室による、地層を模したサンドアート体
験の様子。小・中・高生で賑わうなか、入



オープニングセレモニー
所長挨拶



生産技術研究所
岡部 徹



先端科学技術研究センター
杉山 正和



坂本研究室 / 生研
建築・都市の音環境

2



岡部洋二研究室 / 生研
超音波を用いた複合材構造
の健全性診断システム



巻研究室 / 生研
海中プラットフォーム
システムの未来形



広報室 / 生研
願いと美りのイチョウ



桑野研究室 / 生研
土・地中構造物の
長期挙動と維持管理



岩本研究室 / 先端研
フォトニックナノ構造と
トポロジカル波動工学



松永研究室 / 生研
毛細血管を起点とした
ヘルスケア



14



15

に行ってみた!

6月10～11日に行われた駒場リサーチキャンパス公開2022。本部広報課のTとAが会場にお邪魔し、様々な展示や催しを拝見しました。190超の企画全部に触れるのは到底無理ですが、各々が遭遇して「いいね」をつけたくなったものについて感想成分多めの会話風原稿で紹介します。

インクルーシブデザイン
ラボラトリー／先端研
科学実験室の
バリアフリー化
の取り組み



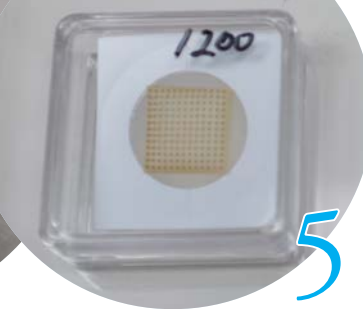
3

神崎研究室／先端研
昆虫がもつ驚異的な匂い
センサと脳のしくみを
のぞいてみよう!



4

金崎研究室／生研
マイクロニードルの新世界
痛くない針と予防医学



5

社会連携研究部門／先端研
水素でつなぐ電気:
あなたは何を繋ぐ?



7

年吉研究室／生研
MEMSでコムサ



8

12
地域共創リビングラボ／先端研
連携協定自治体
マルシェ



©2010熊本県くまモン
協力 銀座熊本館



13

試作工場／生研
加工サンプルの展示と
工作機械設備の紹介



古島研究室／生研
微細精密プレス成形と
マイクロチューブフォーミング



16



17

今井研究室／生研
3Dプリントを用いた
セルフビルド実験建築

口には21年度卒業生の寄贈による手作り桑野玲子先生像が。師弟愛がひしひしと伝わった! 12は、先端研と連携している自治体の出店ブース。石川ブースには北陸を代表する「ビーバー」あらがれが並び、熊本ブースでは先端研の研究者であるくまモンが得意の体操を披露。福島の人おじさん、軽井沢のルイザちゃんも会場入りして愛想を振りまいていたよ。A●今回、コロナ禍のために会場全体で飲食が禁止となり、各自自治体の名物などが食べられなかったのは残念ですね。

職人が作るガラスのバネ

T●13は熟練職人の三澤徹さんがガラスを熱して極細スプリングを作る様子。その細さと軽さと柔らかさにびっくり! 工作機械横では拳動を食い入るように見つめる小学生がいて、説明役のお兄さんも嬉しそうだった! 入口に展示された工作物は、左に回すと普通に回り、右に回すと途中で逆回転になるオブジェ。底面の精細加工の成果らしいけど、不思議!

A●14は総長補佐の岩本敏先生の研究室ですね。ピーカーの底が消えてませんか? T●そう! ガラスとサラダ油は屈折率が近いので両者の境界では光が屈折せず、消えたように見えるとのこと。ほかにも光に関係する不思議現象の実演があり、従来の材料では困難な現象を可能にするフォトニック結晶という人工光学材料構造の世界に参加者を誘っていたよ。

A●15は何ですか? 赤い糸くず? T●健康状態を表す爪先の毛細血管をスキャンした画像で、形のパターンを音楽に変換して直感的に体の状態を知ろうという試みの一環。自分の血管の音色はぼーっとした低音だったよ。赤い切り株みたいなのは研究室のマスコット、Vessy! A●16はレーシングカーですかね。

T●東京大学フォーミュラファクトリーというサークルが造っている車両で、学生フォーミュラ日本大会という学生のF1ともいえる大会に参加しているんだって。古島研究室の技術がボディのフロント部にある衝撃吸収材に結実しているそう。A●17は3Dプリンターで出力したジョイントパーツとアルミパイプと三角形のバ

大石研究室／生研
サイバー考古学とロボティクス

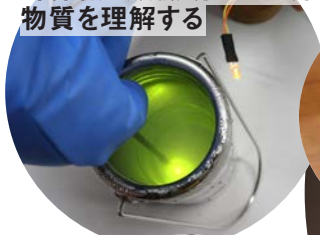
19



ネルを組み合わせた仮設建築のプロトタイプです。ユニバーシティ広場に設置され、休憩所として利用されていました。
 T●18は、風船に入った酸素を液体窒素で冷やすと水色がかった液体酸素になり、磁石にくっつくことの実演。点灯したLEDを冷やすと色が変わる実演も。研究者にとっては当たり前のことでも、中学生や自分にとっては驚きの事実だった！
 A●19のバギーはヒューマノイドロボット。離れた場所にいる操縦者がロボットのカメラ映像を見ながら手足を動かすと連動して動きます。たとえば災害時、人が行けない場所でも行って活動ができるかもしれません。イモムシを検知して農薬を発射するロボットもありました。

18

溝口研究室／生研
計算機と顕微鏡と人工知能で物質を理解する



稲見研究室／先端研
体験して想像する身体の未来

20



マントを着ると姿が消える！

T●20は入口の「自在化」電飾が妖しげな身体情報学の研究室。有名な光学迷彩を初めて体験したら、本当に透けて見えた！光を一方にだけ反射するマントを着てそこに背景と同じ画像を投影するんだって。ホッケーゲームは「Behind The Game」というもので、遠隔対戦時に発生する遅延を考慮し、リアルタイムに撮影された映像からバックの軌道を予測してロボットが操作を支援するとのこと。昔のテレビの「砂の嵐」のような画像は、新しく発見された錯視効果を説明するもの。上半分と下半分が左右に互い違いに画像が動くとな下の画面が手前に見える！
 A●百聞は一見にしかずですね。

菊本研究室／生研
都市の風と環境のモデリング



21

RCAST STUDIO／先端研
RCAST STUDIO公開



八木研究室／生研
環境を支える電気化学材料・プロセス

22



DLX Design Lab／生研
デザインを通じて価値を創造する

23



山中研究室／生研
プロトタイピング&デザイン

25



次世代育成オフィス(ONG)／生研
“STEAM”を体験しよう

24



T●21はビルが並ぶ都市空間における風の流れを説明しているところ。22はマグネシウム蓄電池の可能性について丁寧に説明してくれた学生さんと各種試料です。
 A●23は風洞施設がある1号館の1階、RCAST STUDIOの入口を飾るアート作品「NAHO」。人が近づくと光が灯り、風に揺れる稲穂のように首を垂れます。
 T●24はデザインと工学の融合で革新的な製品やサービスを目指す展示。自動運転バスの床に客に応じた情報を映し出す試みや、近づくとスマホの通信を遮断して対面の会話を促す指輪の発想が面白かった！25は「S展」の作品群。脚でなく背骨の動きで走行を表現したRotebrate、「摺動歯列機構」で滑らかな輪郭を保ったまま変形するelastorso、触ると反応して形を変えるAirless Balloonが面白かった！26はONGと連携する企業等による体験ブースの一つ。JX金属の人と銅の妖精の導きで諸金属の棒に触ってみることで銅の伝導率の高さを実感したよ！
 A●銅で河童の銅パーくん……。

26



多様性が尊重され包摂される公正な共生社会の実現に向けて

D&I宣言を制定



UTokyo
Diversity & Inclusion

6月23日、東京大学はダイバーシティ&インクルージョン宣言を制定しました。本宣言は、昨年公表した基本方針「UTokyo Compass 多様性の海へ：対話が創造する未来」に基づき、東京大学が学術における卓越を達成し、知のイノベーションを生み出し、グローバルに活躍する人材を輩出するためには、ダイバーシティとインクルージョンの推進が重要であるとの認識に立ち、策定しました。本宣言とともに、世界の誰もが来たくなるキャンパスの実現を目指します。

東京大学ダイバーシティ&インクルージョン宣言

東京大学は、多様性が尊重され包摂される公正な共生社会の実現を促していけるよう、東京大学の活動に関わるすべての方々にお伝えしたい指針^①として、「東京大学ダイバーシティ&インクルージョン宣言」を定めます。東京大学は、この宣言とともに、「東京大学憲章」で謳われている多様性尊重の理念を再確認し、新たな段階へと深化させてまいります。

1. ダイバーシティ(多様性)の尊重

東京大学が基本的人権を尊重し、学術における卓越を実現するためには、多様な構成員によるたゆまぬ対話の実践が不可欠です。東京大学は、すべての構成員が人種、民族^②、国籍、性別、性自認、性的指向^③、年齢、言語、宗教、信条、政治上その他の意見、出身、財産、門地その他の地位、婚姻の状況、家族関係^④、ライフスタイル^⑤、障害^⑥、疾患、経歴等の事由によって差別されることのないことを保障します。

2. インクルージョン(包摂性)の推進

東京大学は、インクルージョンの精神を尊び、大学のすべての活動において、構成員の多様な視点が反映されるように努めます。多様な構成員が、意思決定プロセスを含む東京大学のあらゆる活動において、様々な属性や背景を理由に不当に^⑦排除されることなく参画の機会を有することを保障します。そして、東京大学の構成員のみならず、一緒に活動するすべての方々が尊重され、また、その方々に、この宣言の考え方を共有するコミュニティの一員であるとの意識を抱いてもらえるよう努めます。

①この宣言は、構成員にとどまらず本学に関わるすべての方々に本学の姿勢を知っていただくためのものでもあります。②東京大学憲章前文の多様性を尊重するという記述部分に「人種」と「民族」の概念を加えました。今日でもこれらを事由とした差別が後を絶たないからです。③近年のダイバーシティに対する問題意識を反映させるため、

東京大学憲章前文の記述に「性自認」と「性的指向」を加えました。④東京大学憲章前文では「婚姻上の地位」「家庭における地位」の記述がありましたが、これらをパートナーとの関係について広く捉えることができる「婚姻の状況」、旧来的な家族の概念に囚われない多様な家族的あり方全般を示す「家族関係」という表現に改めています。⑤価値観

が多様化し、自らの働き方や生き方を選択する時代になってきていることを受け、「ライフスタイル」も多様性の事由として加えました。⑥障害は個人の側に帰属するものではなくマジョリティに有利なように設計された社会環境によってマイノリティ性をもつ人々が不利益を被っている状況にこそあるという「社会モデル」を採っているため、

「障害」や「障がい」ではなく「障害」の表記となっています(東京大学憲章とも共通)。⑦1.の最後の文にはない「不当に」が入っているのは、2.で示された参画機会の保障は構成員ごとの適格性に応じたものと考えからず。

●詳細は「付属資料」を参照

→<https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/actions/di01.html>



教養教育の現場から

第52回

リベラル・アーツの風

創立以来、東京大学が全学をあげて推進してきたリベラル・アーツ教育。その実践を担う現場では、いま、次々に新しい取組みが始まっています。この隔月連載のコラムでは、本学の構成員に知っておいてほしい教養教育の最前線の姿を、現場にいる推進者の皆さんへの取材でお届けします。

マイノリティの学生が安心して過ごせる空間

／教育プロジェクト「駒場キャンパス・セーフスペース(KOSS)」

国際連携部門
特任助教

井芹真紀子



——KOMABA Safer SpaceでKOSSです。Safer Spaceは一般的な言葉ですか。

「英語圏の大学では普及しています。女性や性的マイノリティなど、キャンパス内で周縁化されやすい人たちが差別や偏見、暴力に晒されることなくより安心して過ごせる場という意味ですが、日本の大学の先例はほとんどないと思います。私はICUから東大の大学院にきましたが、性的マイノリティや女性に対する差別や暴力の現場を目の当たりにしたこともあり、東大にもSafer Spaceが必要だと思いました。清水晶子先生をはじめとする先生方が長い間設立に向けて動かれてきた経緯があり、2020年10月に着任しました」

話を聞いて学術のアドバイスを

「KOSSの特徴は相談施設ではないことです。私もカウンセラーではなくフェミニズム／クィア理論、ディスアビリティ・スタディーズの研究者です。学生が授業の前後などに集まり語らう場ですが、部屋を用意するだけでなく、大学院生アドバイザーや私が常駐し、過去にこういう運動があったとかこのテーマだったらこの本がいいとか、関連するアカデミックな情報を紹介しています。学生が感じたことを学術と繋げるのが重要な役割です」

——発足から1年半はオンラインでの活動だけだったそうですね。

「「シスターフード」、「メイル・ゲイズ」、「ジェンダー・アイデンティティ」など、院生アドバイザーがキータームを解説してから話し合う形でZoomミーティングを続けました。ファッションからボーイズラブまで様々な話題を扱い、読書会、映画DVDの同時再生会、ダイバーシティ・イシューに関心のある教員のトーク会もやりましたが、知らない人同士のZoomだとどうしてもオンライン授業のような感じになりがち。意図した空間にはできず苦渋の日々でした」

「4月にこの部屋が開所となり、状況は一変しました。互いに話すわけではなくても、物理的な空間を共有していれば、別グループの人とつながる可能性が上がります。ふと立ち寄れば上級生や院生がいて話が聞ける。サークルでもクラスでもないですが、来て過ごすうち、部屋で話した人や掲示板を通して自分に合う仲間を見つけるという流れができました」

誰でも歓迎というわけではなく

——多数派の人も来ていいんですか。

「マイノリティだけが来る秘密の場所ではないです。ただ、誰でもウェルカムと

いうわけでもありません。マジョリティ

的な振る舞いをする人が来てマイノリティの学生が居づらくなってはいけません。学生たちが話すなかで差別的な発言が出た際には介入して注意を促しています」

——飲食に使ってもいいんですね。

「はい。ただ後片付けをきちんとやるのが条件です。KOSSは基本的に教育プロジェクトであり、スタッフがもてなす場ではありません。利用者にはピア・コミュニティの一員として参加し、多様性の問題に取り組むための知識と実践経験を積んでほしいんです。UTokyo Compassにはダイバーシティ研究・教育を推進する機構の計画が記されましたが、その一部の活動はすでにここで始まっています。D&Iに関する駒場からのアウトリーチという役目も自負しており、昨年度は中国の同性愛運動、大学におけるジェンダー／セクシュアリティ研究、西洋主流フェミニズムにおけるトランスジェンダー排除と反セックスワークの問題の3テーマで一般公開の学術イベントを行いました。キャンパスの問題を指摘できるマイノリティが増えればマジョリティが違う意見に出会う機会も増える。長い目で見ればそれがD&Iを推進すると思います」

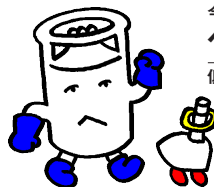


開室●月水木金の13～17時
www.utkoss.org

①ぬいぐるみたちも迎えてくれるKOSSの室内。壁のアートに見える白と水色とピンクはトランスジェンダー、黒と灰色と白と紫はアセクシュアル、ピンクと青と紫はバイセクシュアルを象徴する色だそう。②書棚にはジェンダー／セクシュアリティについての入門書がたくさん。図書館では尋ねにくい人もここなら安心。③102号館の外から見える6色レインボーフラッグ。興味がない人は気づかないが興味がある人ならすぐわかる絶妙なアピール具合。

いちょうの 部屋

学内マスコット放談



今日のゲスト
ヘリウムくんと**チツソちゃん**
低温科学研究センターマスコットキャラクター

口元の「へ」の字と青い安全靴&手袋が特徴。頭部には他キャンパスのヘリウム容器と一線を画すクラシカルタイプのゴム栓が。移動時は衝撃吸収用腹巻を着用。

いちょうくん ローソンのマークを彷彿とさせるボディだね。もしかして中に牛乳が入っているの？

ヘリウムくん 沸点が -269°C の優秀な冷却材、液体ヘリウムだよ。理学でも工学でも農学でも冷却が大事な実験には欠かせないから、いつも低温科学研究センターからトラックで学内各部局に運んでいるんだ。

い ヘリウムって声を変えるものだと思っていたよ！

へ 風船にも使うよね。世界的に非常に貴重なものだから、東大では実験に使ったヘリウムを回収してリサイクルしているよ。弥生と本郷のキャンパスの地下には回収用の配管ネットワークが広がっているんだ。

い すごいね！ところで隣にしているのはアイロン？

へ 窒素容器に化けた妖精のチツソちゃん。沸点は -196°C で液体ヘリウムよりは高いけど、液体窒素も冷却材として重宝されるんだ。ボクに心を授けたのはチツソちゃんらしいんだけど……よくわからないや。

い 2人はいつからどんな活動をしてきたの？

へ 2013年、当時いた事務補佐員さんが原画を描いて提案したのが発端。オープンキャンパスの際、小さい子にも親しみを感じてもらおうと、スタッフTシャツやビジターバスや安全啓発資料にボクらがあしらわれたんだ。液体ヘリウムは取り扱いが難しく、容器を倒したり逆さにするのは厳禁。素手で触ると凍傷になるし、蒸発すると体積が600倍以上に膨張して破裂しちゃうし、酸欠事故につながることもある。だから扱う人には安全講習が義務づけられているよ。

い ……キミたち、かわいいのに凶暴なのね。

へ 普通に使えば問題ないよ。ただ、ヒヤリハットという妖怪がいて、油断すると忍び寄って事故を起こそうとするから、ボクらはずっと注意を促してきたんだ。その甲斐もあって東大の事故件数は年々減っているよ。

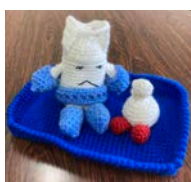
い 優秀だね！今後の展望は何かある？

へ 昨今の国際情勢により貴重なヘリウムがより貴重になっているから現在95%の回収率をもっと上げたいんだ。学内の皆様のさらなるご協力をお願いします！



←妖怪ヒヤリハットはシルクハットが目印

職員お手製のあみぐるみ→



専門知と地域をつなぐ架け橋に

FSレポート!

第19回

工学系研究科修士修了 **横田莉子**
工学系研究科修士1年 **山田拓実**
理科二類2年 **毛防子璃奈**

豪雪の長野県における雪の利活用

私たちは昨年度、長野県北信地域で「雪の利活用」に取り組みました。長野県北信地域は県の最北部に位置する6市町村の総称で、日本有数の豪雪地帯になっています。私たちにとって「雪」は銀世界を創り出してくれたり、スキーの時に見たり、というイメージがありますが、北信地域ではそのようなイメージの反面、雪が降るたびに除雪作業をしなければいけないなど、厄介者のイメージもあります。そこで、せつかく大量にある雪を何らかの形で活用できないかを考えることが私たちに課せられたミッションでした。

1年間の活動を経て、最終的には大きく二つの提案を行いました。一つ目は「除雪を楽しむ施策」で、これは北信地域において“雪=邪魔もの”というイメージを少しでもプラスに改善したい、という思いから生まれたアイデアです。除雪作業後にちょっとした交流の場を提供し、雪のイメージアップや除雪の精神的負担軽減に加え、地域コミュニティの創出をめざします。二つ目は「雪室の効果的なPR方法」です。北信地域には既に雪室という雪の貯蔵庫があり、名産のそばや農作物、日本酒等を貯蔵して販売したり、冷房として活用されています。ただ、現時点では地



オンラインでの話し合いの様子



雪室の外観

元でもあまり知られていないため、私たち地域外の若者の視点を生かし、効果的なSNS活用法や、webサイトの構成案等を提案しました。

「雪の利活用」というテーマは自由度が高い一方で、雪という素材には意外と都会の「理想」と地域の「現実」のギャップがあります。加えて、昨年度は現地の状況を知る機会が限られており、本当に現地の方に受け入れてもらえる企画なのか？とかなり悩みました。しかし、様々な世代、専門分野のメンバー全員でオンラインながらも密に議論を重ね、現地の方々にも何度もインタビューにご協力いただき、なんとか1年間で形にすることができたように思います。今後、北信地域で雪の利活用が進められていく際、私たちの成果が少しでも役に立つ場面があれば嬉しいです。

ワタシのオシゴト 第194回

RELAY COLUMN

本部国際交流課
特任専門職員 紫村次宏

多趣味も活きる国際学生交流業務



オフィス横の広場でたまにミット打ちもやります

子供の頃から東大的な存在に反感し、横浜出身なのに敢えて関西の大学に進学。映画制作にハマり三留してから就いた仕事はFM放送ディレクター。バブルがはじけ給料が激減したのでJICAに転職。バングラデシュ2年、インドネシア2年、タイに3年専門家として赴任し、AUN/SEED-Netプロジェクトでカラオケ友達になった先生に誘われ東工大で9年国際連携コーディネーターとして従事。SGU祭りで各大学の公募に応募、東工大は落ちて東大に特任専門職員として拾われた2015年には、すっかり人が丸くなりました。

本部国際交流課では学生交流覚書や有料短期プログラムの広報・LMSを担当、最近は動画撮影・編集マンとして、学内から発注を受けることも。一番楽しかったのは東南アジアに引率した学生達が途上国ショックを受けるのをニヤニヤしながらケアする仕事でした。

プライベートで一番時間を割いているのが、昼休みに開講したウクレレ教室のメンバーと結成したバンド。他にも趣味は、全楽器、珈琲、タイ/インドネシア語、格闘技、タップダンス、予備自衛官、MENZA、ルービックキューブ等。どれでも引かかるものがあればTeamsでお気軽に連絡ください！



「シム兄とマハロ楽団」が毎年主催する対バンイベント(6月19日)より。演奏者とダンサーも常時募集中♪

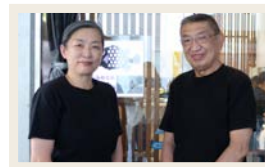
得意ワザ：明日できそうなことは今日やらない
自分の性格：負けず嫌い。極力「できない」と言わない
次回執筆のご指名：川合ゆり華さん
次回執筆との関係：交流課の元学生スタッフ&バンド仲間
次回執筆の紹介：ひたすら爪を隠し続ける能ある鷹

ぶらり
構内ショップの旅

お魚倶楽部はま @柏キャンパス の巻

珍しい魚を使った絶品お寿司

柏キャンパスの大気海洋研究所一階にお店を構える「お魚倶楽部はま」。新鮮なネタを使った寿司を握るのは、この道60



濱さんご夫婦

年の濱弘泰さんです。もともとは中野区にあった海洋研究所の近くで営業していましたが、海洋研が柏に移転する時に常連客だった教員たちから話を聞き、入札を経て、2010年に現在のお店をオープンしました。

人気の日替わりランチ丼は550円。お手頃価格で提供するために、何日も前からメニューを考え、全国の人脈を駆使して鮮度のよい魚を安く仕入れる努力を続けてきたそうです。例えば、足が一部欠けている毛ガニや、通常サイズより小さいのどぐろなど、市場には出回らず漁師が食べている魚は、見た目は違っても下ろせば同じだと濱さんは話します。他にも海鮮丼にとぎり5貫がセットになった「はまスペシャル」(890円)や、にぎり8貫に巻き寿司3個がついた「にぎり」(1000円)などがあります。そして、はまに行ったらぜひ試してもらいたいの、日替わりの「地魚5貫にとぎり」(870円)。マトウダイ、ハマフエフキ、オオカミウオ、ニュウドウカジカなどの、珍しい魚を食べられます。

「私が扱っているのは、普通の寿司屋じゃなかなか使わない魚なんです。原点はみんなに喜んでもらいたいということ。知らない魚をたくさん食べてもらいたい。美味しいんです」と濱さん。

主な仕入れ先は京都。濱さんが「最高の目利き」と絶賛する卸売が、さまざまな珍しい魚を送ってくれるそうです。美味しい寿司を提供するために、全国の漁港などを訪れ、漁師さんと人脈を築くことも大切にしてきました。魚だけでなく日本酒にもこだわっているそうです。入手困難な十四代は一合780円という驚きの低価格で味わうことができます。他にも鍋島、菊姫にごり酒など、日本酒好きにはたまらない品揃えです。仕事後の一杯や味わったことがない魚と出会いに、はまに行ってみてはいかがでしょうか。



ランチ ● 11:30-14:00 (LO 13:30)
ディナー ● 17:00-21:30 (LO 20:30)

海鮮丼に握り5貫がついて「はまスペシャル」

twitter.com/hamaosakana

インタープリターズ・第179回 バイブル

情報学環 教授
科学技術インタープリター養成部門

佐倉 統

ツイッター! 万才

SNSといえば、まあ、あんまり評判はよくない。度を越した誹謗中傷が有名人を自殺に追い詰めた。デマやフェイクニュースの温床になっている。世間の意見の分断を煽る……。

これらいずれもまったくその通りなのだが、しかしその一方で、ツイッターが科学の進歩に貢献したという楽しいニュースもある。

アマチュア写真家がツイッターに投稿した一枚の写真を、ダニの分類の専門家・島野智之教授（法政大学）が目にした。そこに写っているのは、どうも今までに見たことない新種のような。で、実際に採集して調べた。やっぱり新種だった。命名・*Ameronothrus twitter*（チョウシハマベダニ、俗名ツイッターハマベダニ）。「発見者」にちなんでtwitterと学名に入っている。

そのニュースを聞いた鳥取大学の大学院生・大生唯統^{おおばえいと}さんが、ツイッターにダニの写真を投稿した。今話題のハマベダニってこれか、と。それを見たのがまた島野教授。鳥取でハマベダニは珍しい。いや、こいつは、なんかちょっと違うんじゃない……？

そして調べてみたら、ピンゴ！別の新しい種だった。きっかけがリツイートだったので学名は*Ameronothrus retweet*（イワドハマベダニ）。

この話題はもちろんツイッター上でバズった。「次の学名はiineかな」という声もある。ツイッターとハサミは使いようである。

だけど、最初にも書いたように、SNSはしばしばとても評判が悪い。諸悪の根源のように言う人さえいる。さて、ではどうすればツイッターを誰もが安心して使えて、最新の情報が入手できる、楽しいコミュニケーションツールにできるのかといえば、見通しは立たない。

ダニの写真をしながら、このような使い方を真似していくしかないのだろうか、などと思うのだった。



大生さんのTwitter投稿より

科学技術インタープリター養成プログラム
<http://science-interpretor.c.u-tokyo.ac.jp>

ききんの き

寄付でつくる東大の未来

第33回

渉外部門
シニア・ディレクター

石岡吉泰

スポーツが大学をもっと元気に

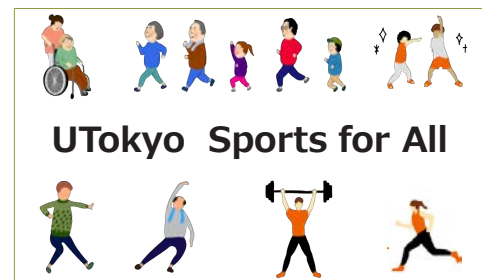
大学スポーツと聞くと学生アスリート集団である運動部の活動、スポーツは体を動かすのが好きな人がすることってイメージが強く、運動にあまり興味のない人など、自分には関係ないって思われている方も少なくないのではないのでしょうか。

確かにそういった側面もあるかもしれませんが、スポーツは決して一部の人のものではありません。日本におけるスポーツに関する施策の基本事項を定めた法律であるスポーツ基本法には「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利」で「全国民がスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、又はスポーツを支える活動に参画することのできる機会が確保されなければならない」と定められています。

コロナ禍で在宅勤務と出勤とのハイブリッド生活が続き、体重増加や心身の不調を感じてウォーキングやジョギングを始める方も多く、運動の大切さがより注目されるようになりました。心と体を最適な状態に維持するにはどうすればよいのか、学内の運動施設をスマート化し、利用者の様々な情報を自動的に取得・解析・フィードバックし、コンディショニングを管理するシステムを開発する研究プロジェクトがスポーツ先端科学連携研究機構を中心に始まっています。まずは、本学の運動部などのアスリートを対象として進め、全ての人に還元することを目指しています。

運動が得意な人もそうでない人も、障害のある人もない人も、世代を問わず、自分に合った方法で体を動かし、心身ともに健康になれる運動施設。毎日のように練習に取り組んでいる運動部がお手本となることでみんなにとってより近い存在になる。多様な人たちが同じ場所（オンラインとリアルハイブリッド空間かもしれません）で、スポーツを通じて交流し、ゆるやかなつながりが生まれる。

そんな大学スポーツの新しいカタチを東京大学が実現する日を夢見て、社会連携本部渉外部門スポーツチームは、学内外とスポーツをつなぎ続けます。



東京大学基金事務局（本部渉外課）
kikin.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

トピックス 全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles)に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル (一部省略している場合があります)
6月14日～7月7日	広報室	研究者が薦める映画4～9 『博士の異常な愛情』／国際政治学・藤原帰一、『アポロ13』／流体工学・大島まり、『曲面の秘密——マリアムの魔法の杖』／数学・伊藤由佳理、『2001年宇宙の旅』／科学論研究・佐倉統、『メッセージ』／進化生態学・深野祐也&素粒子物理学・大栗博司、『ドラえもん のび太の宇宙開拓史』／身体情報学・稲見昌彦 『淡青』44号より
6月17日	本部国際戦略課	AUA主催バイオダイバーシティ・フォトコンテストで本学職員が入賞
6月20日	総合文化研究科・教養学部	オマーン・スルタン国政府から本学に書籍寄贈、在京大使を迎え式典が開催
6月24日	男女共同参画室	「東京大学 ダイバーシティ&インクルージョン宣言」を制定
6月29日～7月6日	教育学研究科、東京カレッジ、医学系研究科、工学系研究科、薬学系研究科、カブリ数物連携宇宙研究機構、ニューロインテリジェンス国際研究機構、経済学研究科、新領域創成科学研究科、定量生命科学研究所、社会科学研究所、空間情報科学研究センター、広報室	教育学部セーフスペースとオールジェンダートイレの開設、Disability, Accessibility, and Inclusive Higher Education、多様な人材が集う場としての医学・医療の未来、D&Iを強力に推進する働き方改革アクションプラン、車椅子を必要とする学生の分子細胞生物学研究、著名女性物理学者・呉雄雄栄誉ポスドク・フェローシップの設立、D&Iに加えてEquityを確保するStartup Fundの取組み、在宅勤務を通じた障害者雇用、女性特任教員支援制度、定量研の国際化とD&I、障がいを持つ方・日本語を使わない方など誰もが安心して働ける環境の整備、女性教員の積極的な採用 UTokyo D&I アクションとメッセージ
6月27日	グローバルキャンパス推進本部	東京大学—ストックホルム大学群 戦略的パートナーシップ協定を更新
6月28日	男女共同参画室	大沢真理名誉教授が令和4年度男女共同参画社会づくり功労者内閣総理大臣表彰を受賞
7月1日	広報室	さつき会 鶴静恵子様、株式会社サンリオエンターテイメント 小巻 亜矢子様、日本ロレアル株式会社 ジェン-ピエール・シャリトン様 UTokyo D&I 応援メッセージ
7月4日	本部協創課	Beyond AIサイエンスカフェ【第6回】(池内与志穂先生)を公開
7月4日	公共政策大学院	「戦略的コミュニケーション教育・研究ユニット」を新たに設置
7月4日	カブリ数物連携宇宙研究機構	国際数学連合の総裁に選出——中島啓教授
7月5日	本部人事企画課	令和4年度名誉教授の称号授与
7月8日	本部広報課	安倍晋三元首相銃撃事件について (藤井総長メッセージ)

CLOSE UP 戦略的コミュニケーションの教育・研究プロジェクトを開始 (公共政策大学院)



GraSPPの飯田敬輔院長と駐日EU代表部のハイツェ・ジメルス臨時代理大使

公共政策大学院 (GraSPP) は、欧州連合 (EU) の支援を受け、「戦略的コミュニケーション」の研究・教育プログラムに関する「戦略的コミュニケーション教育・研究ユニット」を設置しました。青井千由紀教授の指揮の下、同ユニットは、特に欧州と日本の視点や専門的な知見を結集させることに重点を置いて、戦略的コミュニケーションに関する教育・研究・実務家セミナーを実施します。

飯田敬輔公共政策大学院長とハイツェ・ジ

メルス駐日EU代表部臨時代理大使は、6月30日に同プロジェクトを正式に発足させました。同ユニットへの支援として、EUとドイツ連邦外務省が共同出資するEUプロジェクト「アジアにおけるアジアとの安全保障協力の強化 (Enhancing Security Cooperation In and With Asia= ESIWA)」から、最初の2年間に242,000ユーロの助成金が提供されます。プログラムについてはESIWAとGraSPPが共同で運営します。

表紙について / フジコ・ヘミング演奏会

6月17日、安田講堂でフジコ・ヘミングさんの演奏会が行われました (主催: 東京大学校友会 共催: 社会連携本部、農学生命科学研究科 後援: 株式会社グッドソイルグループ、一般財団法人フジコ・ヘミング財団)。昨年度まで農学生命科学研究科に在籍した田之倉優先生が共同研究を進めていたグッドソイルグループとフジコさんとのご縁、そして何より、コロナ禍で勉学に励む本学の学生を、将来の期待を込めて応援したいというフジコさんのあたたかいご厚情があって初めて実現した企画です。

演奏会はハイブリッド形式で行われま

した。約900人の学生が会場で、会場で観覧できなかった学生、教職員、校友会の会員など約2,500人の皆様がオンラインで、即興曲第3番変ト長調作品90 (F.シューベルト)、ノクターン変ホ長調作品9-2 (F.ショパン)、バガニーニによる大練習曲第3番嬰ト短調「ラ・カンパネラ」作品141より (F.リスト) など、クラシックピアノの偉才による名演奏に耳を傾けました。演奏後、学生代表がフジコさんに感謝の花束を贈呈し、執行役・副学長 (社会連携担当) の津田敦先生が「魂のピアニスト」と関係各位へ謝辞を述べました。



演奏用ではない講堂の音響効果が心配されましたが、ご本人の談によると音の響きをとても気に入ったよう。

写真: 貝塚純一

※「学内広報」では広告掲載を受け付けています。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。↓本部広報課（03・5841・2031）



CLOSE UP **ストックホルム大学群とのパートナーシップ協定を更新** （グローバルキャンパス推進本部）



（左から）カロリンスカ研究所Ottersen 所長、藤井総長、ストックホルム大学 Widding 学長、スウェーデン王立工科大学 Karlsson 学長

6月1日、東京大学とストックホルム大学群（ストックホルム大学、スウェーデン王立工科大学、カロリンスカ研究所）との戦略的パートナーシップ協定更新にかかる調印式が、ストックホルムで執り行われました。調印式には、ストックホルム大学の Astrid Söderbergh Widding 学長、スウェーデン王立工科大学の Sigbritt Karlsson 学長、カロリンスカ研究所の Ole Petter Ottersen 所長、本学の藤井輝夫総長が参加しました。

ストックホルム大学群と東京大学は2017年に協定を締結し、Sustainabilityを共通のテーマとして活発に交流してきました。4機関合同の国際ワークショップはこれまで4回開催し、両国に共通する課題で学術的要請も

大きいテーマを工学・医学・社会科学等の角度から取り上げてきました。

学生交流においては、従来実施されてきた工学系研究科とスウェーデン王立工科大学、教育学研究科とストックホルム大学の教育プログラムなどに加えて、2020年には医学系研究科とカロリンスカ研究所との交流協定にもとづく相互派遣プログラムも始動しました。また、交換講義（講義の共有化）による教員交流や、教職員・学生を対象とした国際教育に関するワークショップ、FDセミナー等を開催し、教育分野でも協働してきました。

このたびの協定更新を踏まえ、学生交流、共同研究等のさらなる充実と、分野融合的・部局横断的な取り組みを推進する予定です。



CLOSE UP **オマーン・スルタン国から書籍が寄贈されました** （総合文化研究科）



（上）寄贈書籍の目録がプサイディ大使から森山研究科長へ。（下）大使から特産品「乳香」の説明を受ける森山研究科長

6月9日、モハメッド・アル・ブサイディ大使、マーナ・アルカシリ参事官を駒場キャンパスに迎えて、総合文化研究科の森山工研究科長、真船文隆副研究科長、月脚達彦副研究科長出席のもと、東京大学中東地域研究センター（UTCMES）附属ムハンマド・サワード・バフワーン中東研究文庫に対する書籍の寄贈式典が開催されました。

森山研究科長からは、オマーン・スルタン国政府から本学の教育・研究活動に寛大な支援を受けていることに感謝が示され、今回の書籍の寄贈は本学の研究・教育活動をより一層充実させるものであるとの挨拶がありました。また、本式典が、日本とオマーン・スルタン国の外交関係樹立50周年にあたる本年に開催されたことの意義に触れ、両国の大学

間での学術交流がさらに発展することへの期待が述べられました。プサイディ大使は、故カブース国王が就任演説の際に教育と研究の重要性に言及したこと、現ハイサム国王も就任演説の際に教育と知識を重視する姿勢を示したことに言及し、日本とオマーンのさらなる学術交流に期待したいと応じました。また、6月6日に本学柏キャンパスを訪問してスーパーコンピュータを視察したことに触れ、より多くのオマーン人学生が本学で学ぶこと、オマーン・スルタン国に日本人留学生が多く訪れることを望む旨が述べられました。

今回寄贈されたのは、オマーン・スルタン国の歴史、文化、イバード派を中心とする信仰に関するコレクション。UTCMES附属バフワーン文庫に配架されます。



CLOSE UP **中島啓教授が国際数学連合の次期総裁に** （カブリ数物連携宇宙研究機構）



中島啓教授

7月4日、国際数学連合（International Mathematical Union, IMU）は、カブリ数物連携宇宙研究機構（Kavli IPMU）の中島啓教授を次期総裁に選出したことをIMU総会で発表しました。アジア圏から総裁に選出されるのは、2015年から総裁を務めた森重文氏以来2人目となります。

IMUは、1920年に設立後、解散。1951年に日本を含む10カ国の数学団体の加盟により再興した国際的な非政府・非営利の科学組織で、数学分野における国際協力を推進することを目的としています。現在、80カ国以上の数学団体が加盟しており、数学のノーベル賞と称されるフィールズ賞をはじめ、数学界で最高の栄誉とされる科学賞を授与することで知られています。

中島教授は2006年以来、いくつかのIMU関連委員会の委員を務めてきました。今回の選出について中島教授は以下のように述べています。「国際的な交流を今後どのように進めていくのが難しい時期に大役を仰せつかり、大きな責任を感じています。世界各国の数学者と協力しながら、運営を進めて行きたいと思います」。大栗博司 Kavli IPMU 機構長は、中島教授の選出について次のように述べています。「国際数学連合の総裁選出は、中島教授の数学における業績と指導力が高く評価されたものです。この重要な責務を引き受けられたことを称賛し、国際数学連合における中島教授の活躍に期待します」。

中島教授は2023年からIMU総裁に就任し、4年間その任にあたる予定です。



HOT & BOTHERED...EXCITED & INSPIRED

On the 1st July the BBC News announces, “Japan is sweltering under the hottest day yet of its worst heatwave since records began in 1875”. I can feel that heat, I am in the DLX Design Lab in UTokyo’s Komaba II Research campus. It’s already too hot for this time of year and we all know why: climate change. As the British say it is enough to make me “hot and bothered”, but earlier this year I found a great reason to be excited and inspired. In April, the UN’s Intergovernmental Panel on Climate Change (IPCC) released a new part of the Mitigation of Climate Change report. This is the first IPCC report to provide an in-depth assessment of how human behaviour, choices and consumption can contribute to climate change mitigation. This is a big difference to previous releases. In the report there is the idea that reducing people’s personal demand for energy in shelter, mobility and nutrition can make a significant impact. The IPCC believes changes in these areas could limit emissions from end-use sectors* by 40-70% by 2050.

What is exciting about this report is that it makes it much clearer that our own personal decisions can really have a benefit. So how can we, UTokyo people, help? There are already some key initiatives happening at UTokyo, the UTokyo Center for Climate Solutions (UTCCS) is bringing together many experts in the fields of climate science, public policy, and justice. Also, there are some new international collaborative initiatives which will improve our ability to take meaningful

action in the future. Here at DLX Design Lab over the last 2 months we have been guiding a group of 30 students to explore climate solutions in a design thinking class. They have created ideas for new types of cooling systems for buildings, retail spaces designed to reduce food waste, and ways to attract people to use electric vehicles. This class proves to me EVERYONE can get involved. There is a myth that you need to understand problems in depth in order to come up with innovative solutions, but a deep understanding can constrain new thinking. I prefer the philosophy from Edward Turner, a genius engineer from Triumph Motorcycles:

“The best progress is likely to be made by the person who doesn’t know all the reasons why the job can’t be done!”

Why don’t we all think how we can take action? How can we integrate climate action into our everyday university lives, from the classes faculty deliver to the application of knowledge that students learn? The collective power of intelligent, creative thinking can help the global community hit the targets that we clearly need to reach. My question to you is what do you think needs to happen at UTokyo to make sure that climate change thinking can be turned into climate change action?

Contact: miles@designlab.ac

ペニンントン・マイルス (生産技術研究所)



Nutrition Futures: Collaboration between Prof. Shoji Takeuchi’s Bio-Hybrid Lab (IIS) + DLX Designer Ahad Mahmood: Concept designs for new synthetic meat recipes to replace high impact natural meat production.



Community collaboration: Workshops led by DLX Designer Tomomi Sayuda on the OMNI project to engage people in the problem of ocean plastic litter.



SPACHA: Recharge your electric vehicle and yourself. A concept idea from a student project (part of DLX Design Thinking class) looking at how to encourage more people to purchase electric vehicles

* End-use sectors are transportation, industrial, commercial, and residential sectors because they consume primary energy and electricity produced by the electric power producers.

